

吉原史資料を事例とした歴史資料へのアクセス阻害要因をめぐる諸問題

著者：倉金 宙本(中央大学大学院文学研究科)^A

Various Issues on Factors hindering Access to Historical Materials with the Case of Yoshiwara Historical Materials

Author: Hironari Kurakane (Chuo Graduate School of Letters)

要旨

本稿の目的は、筆者が吉原の歴史に関連する史資料の探索において直面した当該史資料へのアクセスの障壁を分析・考察し、アクセス阻害要因を明らかにすることにある。

吉原史資料研究は、細見が注目され始めた1970年代以降現在まで、その史資料の形式や外型の変遷を中心とした書誌学的分析に研究がとどまっている。こういった研究は無論必要である。しかし、同じ事件についての史資料を読み比べや、細見と評判記の差を示すことも必要である。そういった研究への前進のため様々な吉原の史資料の入手を試みた。その入手に至る一連のなかで、いくつかの障害があった。そのため本稿は、吉原の歴史資料へのアクセス阻害の実例とその阻害要因を複数の事例を挙げつつ、それへの分析・整理をなしたものである。

第2章では、これまで報告された吉原研究および吉原史資料研究の成果を紹介するとともに、史資料の消失などに関わる事件などを示す。第3章では、筆者の史資料探索における台東区役所、東北大学附属図書館狩野文庫、近世風俗研究会、岩瀬文庫、東京都公文書館の事例を取り上げ、続く第4章では、当該史資料へのアクセス阻害要因を整理・考察した。その結果、大学図書館や役所といった公の施設でさえ、史資料の滅失があったことが判明した。また、国立国会図書館のように史資料は存在するが、掲載情報の不備によるアクセス阻害もあった。その他には、東京都公文書館や岩瀬文庫のように交通アクセスによる阻害もあったことが判明した。

Abstract

The purpose of this paper is to analyze and discuss the barriers to accessing historical materials related to the history of Yoshiwara that the author has faced in his search for historical materials related to the history of Yoshiwara, and to identify the factors that inhibit access.

Since the 1970s, when Saiken began to attract attention, research on Yoshiwara historical materials has been limited to bibliometric analysis focusing

^A Corresponding Author: E-mail: a18.mjek@g.chuo-u.ac.jp

on changes in the form and external type of the historical materials. This type of research is, of course, necessary. However, it is also necessary to read and compare historical materials on the same case and to show the difference between Saiken and Hyobanki. In order to advance such research, we have attempted to obtain various historical materials on Yoshiwara. In the process of obtaining these materials, we encountered several obstacles. Therefore, this paper analyzes and organizes the obstacles to accessing Yoshiwara historical materials, citing several examples of such obstacles and the factors that prevented their access.

Chapter 2 introduces the results of Yoshiwara research and research on Yoshiwara historical materials reported so far, and describes incidents related to the disappearance of historical materials. Chapter 3 discusses the author's search for historical materials at the Taito Ward Office, the Kano Collection of the Tohoku University Library, the Society for the Study of Early Modern Customs, the Iwase Collection, and the Tokyo Metropolitan Archives. As a result, it was found that even public facilities such as university libraries and government offices had lost historical materials. In addition, there were some facilities, such as the National Diet Library, where historical materials existed, but access to them was impeded due to inadequate information. In addition, it was found that the Tokyo Metropolitan Archives and the Iwase Bunko were also hindered by transportation access.

キーワード : 吉原遊廓、吉原細見、アーカイブ、記録管理

Key words : Brothel in Yoshiwara, Yoshiwara Saiken, archive, Record Management

目次

1. はじめに	3
2. 吉原研究の成果と史資料滅失の現在の状況	4
3. 吉原研究に用いる史資料の概要と当該史料へのアクセス阻害に関わる実例	5
3.1 嘉永2年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件に関わる史資料	5
3.2 西山松之助が存在を明言した内容不明の吉原の希少本	7
3.3 近世風俗研究会による細見類の刊行物	7
3.4 岩瀬文庫所蔵の吉原に関わる史資料群	8
3.5 東京都公文書館所蔵の遊女関連史資料	9
3.6 国立国会図書館デジタルコレクションに収蔵されている史資料群	9
4. 史資料へのアクセスにおける障壁	10
4.1 史資料の滅失またはその可能性	10
4.2 絶版による希少性と入手価格の高騰	11
4.3 目録の正確性の欠如	11
4.4 物理的アクセス：岩瀬文庫、東京都公文書館	13
5. おわりに	15
参考文献	16

1. はじめに

19世紀より吉原遊廓¹を主題とするさまざまな研究成果が報告されている。遊女に関する女性学からの研究やその支配構造に関する歴史学からの研究、また、史資料自体の分析をなす国文学からの研究などがある²。こういった研究は、史資料があつて初めてなせるものである。しかし、実際に吉原研究において用いられた史資料の取得を筆者が試みると、史資料へのアクセスそのものに問題があることが明らかになった。

本稿は、吉原遊廓に関する史資料を対象として、当該史資料の入手が不可能あるいは困難な事例を報告、考察し、歴史資料へのアクセス阻害要因の諸問題を整理する。第2章では、これまで報告された吉原研究、特に吉原史資料研究の成果を紹介しながら史資料の入手可否が研究に及ぼす影響を示すとともに、史資料の消失などに関わる事件などを示す。第3章では、筆者の史資料探索における台東区役所、東北大学附属図書館狩野文庫、近世風俗研究会、岩瀬文庫、東京都公文書館の事例を取り上げ、続く第4章では、当該史資料へのアクセス阻害要因を整理・考察し、最後に本論のまとめと当該史資料のアクセス問題の解消に関わる提案を示す。

2. 吉原研究の成果と史資料滅失の現在の状況

これまで、吉原をテーマとする研究は、国文学あるいは歴史学において重点的になされてきた。

代表的なものとして吉原に都市論的性格を当てはめ、遊廓を1つの都市として論じた塚田孝³やそれを発展させた吉田伸之⁴の研究がある。そのほかにも、蔦屋重三郎を中心に、蔦屋細見の詳細を明らかにした鈴木俊幸⁵や、当時多くの未活用史資料を使用しながら吉原の概観を明らかにした石井良助⁶による研究などがある。これらの研究は、主に絵画も含めた史資料の分析・考察によってなされるものであるが、史資料に特化した吉原史資料研究によってもさまざまな成果がもたらされた。

例えば、宮本由紀子は、遊女の名寄せと吉原の地図帳が一体となった書物と解される「吉原細見(以下、細見)」⁷を対象として、元禄から寛政期に至るまでの書式変遷、幕末・明治期の書式変遷をまとめ上げた⁸。歴史学において細見を主題として扱った研究は、管見の限りこの他にない。そのほかにも、高木まどかは、細見の祖とされる遊女評判記(以下、評判記)(元々評判記の巻末にあった「遊女名寄せの部」が独立して、細見となったとされる⁹)を対象として、小野晋などの先行研究¹⁰をまとめつつ、評判記の作成動機、その作成者などを実証的に明らかにするといった新たな成果をもたらした¹¹。また、宮本、高木の研究とは異なり、遊女自身が史資料の書き手となるエゴ・ドキュメント(「一人称」で書かれた史資料¹²)を中心に扱った横山百合子の研究¹³は、特に幕末の吉原の一側面を捉えたという点において意義があるものであった。

これらは、細見や評判記、「梅本記」などの当代の史資料にあたり、読み込んでいくことによってなされてきた。その成果は論文や図書の形で今日見ることができる。しかし、それらの基となった参考資料にアクセスできない事例がある。

例えば、加藤雀庵の「新吉原細見記考」¹⁴に取り上げられた細見のなかに、管見の限り、現在ではその存在が確認できていないものがある。「新吉原細見記考」には万治元年から安永まで細見63冊を収めているが、明和8(1771)年の「ひたち帯」はその一例である。

その他には石井良助が1967年に著した『吉原—江戸の遊廓の実態—』の例がある。石井は著書の中で以下の通り、『吉原細見の図』および『芳原細見』という2つの史料を提示している。

このように、散茶は寛文8年に生まれたというのが通説であるが、しかし、これに矛盾する史料が存在する。それは万治元年(1658)の『吉原細見の図』および同年の『芳原細見』には、太夫3人、格子67人、局365人、讃茶669人、次女郎1104人とし、饗屋253軒、揚屋19軒、茶屋18軒としている。¹⁵(下線は筆者による)

この2つの史料のうち、前者は、漢字は異なるが、現在万治元年の吉原細見として知られている「芳原細見之圖」と推察される。一方、後者に関してはこれに比肩される史料の存在

が、確認できていない。石井の所蔵していた史料は石井コレクションとして江戸東京博物館および専修大学に存在するが、この史料は管見の限りない。¹⁶

以上のもも含め吉原の史資料にアクセスできなくなった原因はさまざまである。その1つが災害によるものである。例えば、近世日本では、火事が頻発し、江戸の大火と呼ばれるものは49回ある¹⁷。なお、吉原は開基から幕末まで36回火事にあい、うち21回で全焼に見舞われている¹⁸。明治期には映画「吉原炎上」のもとになったと言われる明治44年の大火があった¹⁹。その後、大正12(1923)年における関東大震災での被害²⁰や太平洋戦争での空襲²¹でも史資料は失われたと推察される。

また、石井によれば、吉原では火事を助長していたきらいもあり、一旦火事が起きれば、残りを焼き払ったようである²²。そのため、自ら史資料を失っていた可能性がある。

また、現代においても同様である。網野善彦は、阪神淡路大震災の際に、倒壊した家に行き、史料を探したが見つけることができなかつた事例を挙げている。散り散りに埋もれたか、盗まれたか不明だが、散逸の一例である。これは、災害の影響もさることながら、個人宅に歴史文書がそもそもあるという問題点も含んだ事例である。

天災および吉原の史資料以外では、千葉県文書館が2015年度に収蔵文書10,000冊以上誤廃棄した問題²³や、川越市立博物館の「二十四ポンド長胴筒五分一之匁」の紛失事例²⁴がある。

3. 吉原研究に用いる史資料の概要と当該史料へのアクセス阻害に関わる実例

前章の後半で、いくらかの吉原史資料が消失した事例や原因について簡単に触れたが、古い史資料ほど、人災や天災、廃棄などにより残存している可能性が低いと考えるのが自然であろう。筆者の研究対象である吉原遊廓に関わる史資料も多くは江戸期に作成されたものであることから、例に漏れず、その多くが滅失、散逸したものと推察される。その一方で、史資料の保存やアクセスに関わるシステムがある程度発展した現代まで生き延びたにも関わらず、それらの滅失や散逸は生じており、それを免れた史資料もアクセスが十分でないこともままある。本稿の第4章で、その点について整理するが、そのまえに、本章では筆者がこれまでに探索した吉原遊廓の史資料の概要とともに当該資料へのアクセスが阻害されている実例を示すこととする。

3.1 嘉永2年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件に関わる史資料

吉原遊廓研究に用いる史資料の一つとして、遊女らの過酷な状況を示すものがある。それが、嘉永2年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件に関する史資料である。以下に示す史資料のうち、特に台東区役所に保存されている(た)とされる、町奉行へ差し出した名主の調書が特に重要であると考えられるが、当該資料は所在不明となっている。本節では、本件の概要、そのことを示す史資料と各史資料における記述の異なりについて述べ、台東区で確かに保存されていたことを推察するに至った理由を記す。

嘉永2年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件とは、嘉永2(1849)年8月5日、京町1丁目梅本屋²⁵佐吉の厳しい折檻により遊女福岡が亡くなったことを受けて、16人の遊女が放火し、その後佐吉が遠島、遊女も放火の罪で4人が遠島、12人が押込に処せられたと、一般には伝えられている事件である。石井は、『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)のなかで、近頃の不景気を「遊女の取りなしが悪いせいであると(し)て、遊女を責め、縁の下に穴を掘り、鉄鎖で遊女を縛ったままこの穴に入れ、上から六尺の鉄棒でさいなみ、町奉行の命による休業日には一食しか与えな」²⁶く、この厳しい折檻によって遊女福岡は亡くなったとし「そこで、16人の遊女は相談し、付木5把を火鉢に投げ、煙のあがるのを見て、あわただしく、火事火事と連呼したので、近所の人もかねてにくんでいたこととて、大勢集まってきて、わざと家をこわした」²⁷と、本件の背景や様子をまとめている。

本件について記したものがいくつかあるが、その年代やいきさつについて異なる記述がなされているものがある。その一つが、台東区の『新吉原史考』である。その部分を以下に引用しよう。

弘化2年(1845)8月、梅本屋佐吉抱えの遊女福岡が惨酷な折檻のために責め殺された。これに発憤した遊女16人は梅本屋に放火し、その混乱に乗じて自身番へ駆けこみ、抱え主佐吉の非道と福岡を殺した罪を訴えた。梅本屋の遊女の待遇は「芋殻又は豆腐殻、草箒の芽出し並に實葉を混ぜ候雑炊を、日に2度宛、3度は給し申さず、汁は1つかみ程味噌を入れ塩のみ多く差加へ候を啜らせ」と町奉行へ差し出した名主の調書に記されているようなひどいものであった。²⁸(下線は筆者による)

石井の文献と、『新吉原史考』を比較すると、遊女福岡が折檻により死亡したこと、遊女16名が放火したこと、梅本屋遊女の待遇に関する部分について内容に相違はみられない。その一方で、事件が発生した年は、石井が嘉永2年、『新吉原史考』では弘化2年としている。

上記2件は、発生年に差異があるが、事件のいきさつに関する記述が異なる史料がある。それは、横山百合子の「梅本記—嘉永二年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介—」²⁹の出典として用いられた東北大学附属図書館が所蔵する狩野文庫の史料である。狩野文庫には、「新吉原竹島記録」(『東北大学附属図書館所蔵狩野文庫目録』)と題する新吉原江戸町一丁目名主竹島仁左衛門に関わる史料が含まれている。これによれば、遊女福岡を含み誰も死んでおらず、そればかりか福岡は、放火犯の1人として流罪となっている。また、細見を確認すると、嘉永2年に梅本屋は京町に存在していた事実に加え、弘化2年にも梅本屋は角町に存在している。さらに、事件発生年を弘化2年とした『新吉原史考』においては、「京町の」梅本屋とは書いていないため、この記述が誤りであると断定できない。

筆者は、『新吉原史考』の出典の中から、本件の事実の確認および整理に資するものとして、「町奉行へ差し出した名主の調書」に注目し、その取得を試みた。当該史料は、『新吉原

史考』が刊行された1960年（以前に）台東区役所に保存されている可能性が示唆されたため、名主の調書とはどのようなもので、どこに保存されているのか、同区役所に問い合わせところ、所在不明との回答があった。同調書は、その内容によっては、本件の事実を整理する上で重要な史料であるが、『新吉原史考』の出典に誤りがなければ、この60年の間にその貴重な史料が散逸または消失したということになる。

3.2 西山松之助が存在を明言した内容不明の吉原の希少本

狩野文庫は、東北大学附属図書館の特殊文庫の1つで、元第一高等学校学長、京都帝国大学文科大学長の狩野亨吉の旧蔵書からなるもので、1912年からその死後まで、数度にわたって購入または寄付された膨大な和書群をいう。総数は10万8000冊である。³⁰

その幕末の吉原に関する史資料を収蔵している東北大学附属図書館狩野文庫であるが、今回はそこにおける事例も存在した。それは、歴史学者西山松之助が『江戸文化誌』のなかで、ある史料の存在を明らかにし、狩野文庫に所蔵されていることも明言した。西山のそれを引用すれば、

それから狩野文庫というのが東北大学の図書館にあります、村岡典嗣教授が、西山君、狩野文庫の珍しいものを見せようといっせて見せて下さったのが吉原にありました貴重本でした。それは狩野亨吉先生がまだ学生の頃、吉原のある妓楼にしかないという本を所蔵している妓楼に行きまして、(中略) この本をあげようといわれて、頂戴したという、そのいきさつを巻末に朱で詳しく書いてありました。³¹(下線は筆者による)

という。この史料は、第1に内容不明であるため、それが何であるのか知る必要があり、吉原のある妓楼のみが所有していたということからすれば、希少性も疑われる。しかし、東北大学附属図書館狩野文庫に問い合わせた結果、狩野文庫にある貴重図書のうち遊里本、浮世草子、浄瑠璃、歌舞伎関連の書を1ヶ月に及ぶ調査を狩野文庫職員が行ったが、見つけることができなかった。

これら2つの史資料がいかに滅失したのか、あるいはしてないが、調査してもでてこない所に存在するのか不明だが、前者は通説と異なる内容を含み、後者は内容そのものが不明であるということから、吉原研究にとって損失と言える。

3.3 近世風俗研究会による細見類の刊行物

3.1および3.2で示した事例は、滅失の可能性が多分にあり、手の施しようのないものである。吉原史資料は、上記の事例以外にも様々に困難なものがある。その1つが史資料はあるが、手に入りにくいというものである。

その代表は、近世風俗研究会が刊行した細見の復刻シリーズである(表1)。このシリーズは、研究にとって非常に有用である。細見は、様々な機関にまたがって保存、公開している。

つまり、この復刻はそこに行くことなく、なかには個人所蔵本から復刻しており、普段では見ることのできない細見もこれに依ることで研究が可能となる。また、これらに付随する覚書は、花咲一男が復刻のなかで得た知見を書いているため、細見の解釈、読解に有用なものとなる。

表 1 近世風俗研究会による細見類の刊行物

書名	編者	刊行年	発行部数
享保末期吉原細見集	花咲一男編	1976年	限定150部
明和後期吉原細見集	花咲一男編	1976年	限定150部
安永期吉原細見集	花咲一男編	1982年	限定100部
天明期吉原細見集	花咲一男編	1977年	限定100部
宝暦期吉原遊女評判 記細見4種	八木敬一編	1975年	限定100部

表1は、1970年代に主として復刻された細見類である。この時期に連続して復刻に至った経緯はわからないが、花咲一男、八木敬一といった国文学者はその後も江戸風俗関係史料を復刻したり、同じく国文学者の丹羽謙治と共に『吉原細見年表』を作成したりしていることから、国文学においてこの70年代から90年代の関心事ではあったと言えよう。

これらは表1の発行部数から察することができるように、全て現存しており、1人1部持っていたとして、最大100～150人しか入手できない。出版から半世紀経った今日、これらの全てが歴史的な原形のまま現存していないことは、筆者が所蔵しているものに欠落があることからわかる。限定物に因るアクセス阻害の一例である。

3.4 岩瀬文庫所蔵の吉原に関わる史資料群

一方で、資料はあるが、3.3とは別の要因、物理的距離およびそれに伴う費用によるアクセス阻害の例がある。

名古屋駅より約1時間電車に乗ると到着する西尾駅から15分程度歩くと着く西尾市岩瀬文庫は、明治41(1908)年に西尾市の実業家である岩瀬弥助³²が、本を通じた社会貢献を志して創設した私立図書館として誕生した。戦後に西尾市の施設となり、平成15(2003)年4月に日本初の「古書の博物館」としてリニューアルし、平成19年12月7日に登録博物館となった。重要文化財を含む古典籍から近代の実用書まで、幅広い分野と時代の蔵書8万冊余りを保存・公開している。開館時間は、午前9時から午後5時まで(閲覧室は午後4時まで・申請は3時半まで)で、休館日は月曜日(月曜日が祝日の場合は開館)・館内整理日(7月から9月を除く毎月第3木曜日)・年末年始・特別整理期間となっている。³³

岩瀬文庫には、吉原に関する史資料が江戸初期から明治期までである。例えば、細見類は検索すれば111件ヒットし、うち5件は絵図・地図類である。史資料の説明記述のなかには、

西暦と和暦が一致しない（弘化年間の細見）、そもそも史料説明と中身が合っていないもの（「新吉原細見」文久3年（中身は慶應4年）、玉屋面四郎の細見のパロディ（さいせん）を細見と記載するなど）や、くずし字の読み間違い（「新吉原細見」明治15年）も存在するが、おおかたしっかり記載されている³⁴。

細見類以外にも、「元吉原記」、「新吉原火災之事」など数多くの吉原史資料が存在する。

岩瀬文庫では一部の地図類を除き、原則としてデジタルアーカイブを提供していない。したがって史資料の閲覧は、同館に行き原本を確認するほかない。

3.5 東京都公文書館所蔵の遊女関連史資料

東京都公文書館も 3.4 と同様、物理的距離およびそれに伴う費用によりアクセスが妨げられている事例である。東京都公文書館は、昭和43年(1968)10月1日に開設され、都の歴史公文書等や庁内刊行物などを系統的に収集・保存し、これらの効率的な利用を図るとともに、併せて都に関する修史事業を行っている³⁵。同館は、中央線西国分寺駅を降りて15分程度歩けばたどり着く。

東京都公文書館の所蔵史料は、旧幕府の史料として『御府内備考』正・続262冊、『御府内沿革図書』45冊などの地誌類、旧町名主高野家の『撰要永久録』159冊などが所蔵されている。近代以降では、明治期の東京府文書約15,000冊、大正・昭和期の府文書10,000冊余がある。また、東京市文書も明治以降のものが約10,000冊あり、昭和18年の都制施行より現在にわたる長期保存文書が収蔵されている。³⁶

東京都公文書館では、「娼妓解放」2～5の簿冊などの明治期における遊女関連史資料が数多く確認できる。原本の確認も傷み・損傷の具合によっては可能である。「娼妓解放」の史料は、吉原からの解放を願った遊女かしくの事例(政五郎一件、菊次郎一件)³⁷や解放後の実態を示す遊女はつの事例³⁸が書かれたものである。

そのほか資料種別で「吉原」で検索すれば³⁹重複も多いが、1,376件ある。東京都公文書館では、いくつかのパソコンが設置されており、そこでデジタルデータの閲覧、また申し込めば原本の閲覧ができる。しかし、これらは東京都公文書館の中で初めて可能な行為であり、赴かなければならない。

3.6 国立国会図書館デジタルコレクションに収蔵されている史資料群

国立国会図書館は、国会に属する唯一の国立の図書館であり、国内で発行されたすべての出版物は、国立国会図書館に納入することが義務づけられている。同図書館の蔵書数は日本最大であり、その数は4621万点に及ぶ。⁴⁰また、同館は、史資料のデジタル化も進めており、発行当時のそのままの形でデジタル化した史資料や、インターネット上の刊行物などを閲覧できるサービス「国立国会図書館デジタルコレクション」を提供している。⁴¹

「国立国会図書館デジタルコレクション」にも吉原の史資料が収載されている。それらの史資料は多岐にわたるため、そのすべてを把握することは困難であるが、細見と評判記に絞

り、まず「吉原細見」をキーワードとして検索すると、599件がヒットする⁴²。次に、「評判記」をキーワードとして検索すると2,871件がヒットする。

細見について特筆する点として、「国立国会図書館デジタルコレクション」に収載されている細見は明治28年に出版されたものが最新であり、同年代（明治20年代）の細見が数多く収載されている。また、評判記については、遊女評判記のみならず⁴³、役者評判記なども含まれている。以上のように、国立国会図書館は、吉原史資料を幅広く網羅している。

4. 史資料へのアクセスにおける障壁

第2章で述べたとおり、近世日本では、火事が頻発し、江戸の大火と呼ばれるものは49回ある⁴⁴。また、吉原は開基から幕末まで36回火事にあい、うち21回で全焼に見舞われている⁴⁵。このような災害によって滅失した史資料に関わる研究については奥村の文献⁴⁶をご覧いただくとして、本稿では天災以外の史資料へのアクセス阻害要因を明らかにしながら、吉原史資料利用の難しさをはかることとする。

4.1 史資料の滅失またはその可能性

天災以外で史料が滅失する原因の1つとして、史資料の管理体制の変動に因るものが考えられる。3.1、3.2で記した台東区役所および東北大学附属図書館狩野文庫は、管理体制の変動や不備で史資料が行方知らずとなったと考えられる。

『新吉原史考』の「あとがき」は、台東区役所総務課が記しているもので、こういった編纂に少なくとも中心的に当時の総務課が関わっていたことが窺える。1960年代に総務課が担っていたと思われる役は、『台東区史』の編纂の中心である広報課が現在は担っている。しかし、その変遷過程については不詳である。

台東区役所は『新吉原史考』（1960）と『台東区史』（1998）のあいだに庁舎が変わり、この過程で史資料が誤廃棄された可能性もある。また、1960年代後半にはファイリングシステムが導入され、「体系的に文書を保管、保存し、廃棄できるようになった」⁴⁷。これによって文書管理体制が整ったはずであるが、実際に文書が見つからない事例が起こった。

こういったことは、台東区の固有の問題ではなく、自治体組織がよく抱える問題である。

一方、狩野文庫に存在したとされる史料は第3章で述べたように、狩野文庫の担当者が『江戸文化誌』の該当記述を確認し、貴重図書において遊里本や浮世草子に分類されているものを確認したが、見当たらなかった。また、職員が、浄瑠璃や歌舞伎関係の書物も確認したが、発見に至らなかった。狩野文庫には一般図書と貴重図書があり、貴重図書に限って、担当者は確認した。西山の本文を今一度確認すれば、「西山君、狩野文庫の珍しいものを見せようといって見せて下さったのが吉原にありました貴重本でした。」とあるから、求める史料が一般図書に分類されるとは考えにくいためである。

『江戸文化誌』は初出が1980年代であり、おおよそ40年の間に西山のいう史料は見つからなくなってしまったのである。西山の誤認という可能性も排除できないが、この狩野文

庫の話を否定する材料がない以上、その可能性の追及はできない。つまるところ、これも管理体制の不備と指摘できる。

4.2 絶版による希少性と入手価格の高騰

3.3 で記したように、近世風俗研究会によっていくつかの細見類が刊行されていたが、絶版のためその史資料が手に入りにくい。大学図書館も所蔵していないところが多く、古本屋で入手をすることが第一と言える。

しかし、発行部数の少なさから、これら全てが研究者あるいは好事家がこれらを個人で入手するのは困難である。現在、「日本の古本屋」で近世風俗研究会による復刻物を検索すると、そもそも安永、天明のそれはヒットせず、明和後期が 5,500 円、享保末期は 8,000～11,000 円、宝暦期が 9,160～10,000 円となっている⁴⁸。それぞれ数点しか在庫がない。

花咲一男を中心に 1970 年代に主として刊行された細見の復刻板は、限定 100 部ないし、150 部である。こういった希少性から、例えば、『安永期吉原細見集』は（記録上）4つの大学図書館しか所蔵していない⁴⁹。

評判記についても、小野晋の『近世初期遊女評判記集 本文編』は 1965 年の出版であり、現在絶版である。近年、『江戸吉原叢刊』全 7 巻が八木書店より刊行されたが、全 7 巻で 165,000 円する⁵⁰。また、吉原の史資料を一部収載した『吉原風俗資料』も一部の大学図書館に散在している状況である⁵¹。まばらに大学図書館は所蔵されている状況である。

つまり、今一つの課題として所得の低さによるものも、研究を難しくしていると思われる。収入の一例として挙げれば、「博士人材追跡調査一第 4 次報告書一」による博士課程修了年度の翌年度における年間所得をみると、人文は 100～200 万円未満の割合が 2 割（最頻値）を占めた⁵²。他、現役学生もアルバイトや奨学金を基に生活をしている。日本学生支援機構の奨学金で第 1 種（無利子）は修士月額 8.8 万円、博士月額 12.2 万円、第 2 種（有利子）は、修士月額 9.2 万円、博士月額 10.3 万円となっており、修士では約 4 割、博士では約 3 割の学生が受給している⁵³。この「大学院生に対する経済的支援の現状とあり方」では、ファイナンシャルプランの困難さを理由に進学が滞っていることも合わせて言及されており、所得が、研究そのものへの阻害要因となっている。

こういったことから絶版本の復刊、ないしはデジタルアーカイブが望まれる。

4.3 目録の正確性の欠如

国立国会図書館では、デジタルコレクションとして基本的に吉原史資料は公開されている。しかし、そこにおける書誌情報に問題がある。

例えば、「元文五年 吉原細見」⁵⁴は、件名の欄に「評判記」と記されている。たしかに、細見と評判記の区別は明確にされているわけではない。しかし、それは元々評判記の一部とされている細見を、いつどこで細見と評判記に分けるのかという、分かれのほじまりをどこに設定するかという問題であり、ここにおいては明確に評判記ではない。

また、国立公文書館デジタルコレクションにある江戸期の最も新しい文久3(1863)年の細見⁵⁵でも件名は「評判記」とされている。だが、宝暦5(1755)年に評判記は仮名草子に姿を変え、終焉していることから、この件名は不適切である。(図1)

江戸吉原叢刊では評判記は幕末まで続いていることになっているので、評判記の終焉にはいくつかの学説があることはたしかである。しかし、国立国会図書館デジタルコレクションにおける文久3年の細見は宝暦以後の評判記の形である、洒落本や仮名草子の形態をとっておらず、これを「評判記」と見なすことはできない。中身から見ても、「評判」は存在せず、会話文体も存在しないため、これは明らかに細見であり、「評判記」という可能性はない。



書誌情報	
資料種別	Book JapaneseClassicalBook
タイトル	元文五年吉原細見
タイトルよみ	ゲンブンゴネン ヨシワラサイケン
出版地	[江戸]
出版者	鱗形屋孫兵衛
出版年月日	元文5刊
出版年月日(W3CDTF)	1740 F)
容量・大きさ	1冊; 15.6cm
注記	印記: 京伝書蔵 装丁: 和装
永続的識別子	info:ndjip/pid/2541139
識別子 (DOI)	10.11501/2541139
請求記号	寄別5-5-3-1
書誌ID	000007284841
件名	評判記
言語 (ISO639-2)	jpn
古典籍区分	和漢書
コレクション情報	古典籍資料 (貴重書等) > その他
収集日 (W3CDTF)	2011-08-08T14:37:00+09:00
デジタル化製作者	国立国会図書館
デジタル化製作日 (W3CDTF)	2011-03-31
出版地 (国名コー	

図1 元文五年 吉原細見の検索結果

出所：国立国会図書館デジタルコレクション (DOI: 10.11501/2541139)、最終閲覧日 2023年8月20日

以上のような目録の誤りの事例は、吉原研究の初学者が見れば、混乱の原因となる。

国立国会図書館の件名標目は、目録を検索する際の手がかりとして、史資料の主題を表現した統制語⁵⁶である。史資料の内容から検索できるという点で、また統制語であるという点において、検索者は網羅的かつ正確な検索を期待する。しかし、上記のように、細見と(遊女)評判記が異なるものであるにもかかわらず、それらの史資料を区別することなく件名として「評判記」を付与することで問題が生じる。例えば、件名フィールドにおいて「評判記」で検索すると、細見も同時にヒットし、情報が錯綜する。一方で「細見」を検索し、検索された史資料の情報を参照する際、件名に「評判記」と表示されるため、同種あるいは同一の内容を持った資料であると検索者が誤解する可能性がある。また、「吉原細見」で検索をかけると、「細見美名の川」という本来の細見が「評判記」に括られているため検索にヒットしない。

加えて、明治期の細見になると書誌情報も変わり、江戸期の細見にあった書誌情報項目で削られているものがある。例えば、「新吉原細見」明治 21 年⁵⁷では、「件名」表記がない。つまり、明治期の細見は評判記、と検索しても出てこないようになっている。

目録は人と史資料をつなぐ重要な役割を担っている。以上のような江戸期細見における誤りは、史資料へのアクセスを阻害することに加え、人々の史資料自体に対する認識や知識にも影響を与える。したがって、目録に登録された誤った情報は早急に修正されることが望ましい。

4.4 物理的アクセス：岩瀬文庫、東京都公文書館

上記の国立国会図書館デジタルコレクションは、インターネットの環境が整っていれば閲覧可能であり、日本国外にいても当該史資料を閲覧することができる。しかし、こういったシステムをそろえている機関は極少数であり、物理的なアクセスが難しいものが多い。

3.4 で述べたとおり、岩瀬文庫⁵⁸は、愛知県にあり、史資料を求める者の居住地によっては、相応の時間と資金が必要である。原本の確認もできるが、複写には 1 枚 50 円かかり、自分では行えない。現地以外での複写依頼は、部分複写は不可能で、当該史資料の全てを複写することになる。

3.5 で示した東京都公文書館は中央線西国分寺駅から徒歩 15 分程度の距離にあり、地方在住であれば、アクセスのしやすさは岩瀬文庫とほぼ同じだろう。こちらは、既述のように史資料の傷みなどによってはパソコンでの閲覧しかできない。複写は自分で行い、1 枚 10 円である。

岩瀬文庫、東京都公文書館はいずれも、デジタルアーカイブを有している。しかし、それぞれの方針などにより、吉原の史資料のデジタルアーカイブを通じた公開には至っていない。岩瀬文庫は、地図類はデジタルアーカイブを通じて公開しているほか、マイクロフィルム化を確実に進めているが、岩瀬文庫学芸員によると「実際に岩瀬文庫に来て、史料を手にとってもらうため」として、地図類以外の史資料は館内閲覧に限定している。

一方の東京都公文書館は、蔵書のデジタル化およびデジタルアーカイブを通じた一部資

料の公開を行っているが、戦後史料を中心に要望の多いものを優先しているという。ただし、デジタルアーカイブを通じた公開に関わる基準は不明確であり、また、直接来館した場合にも、一部の遊女関連の史資料の閲覧には、個人情報に関する利用について誓約書が必要である。後者については、表2のような規定が存在し、閲覧可否はそれに基づいて決定される。

表 2 30年を経過した特定歴史公文書等に記録されている個人に関する情報について

特定歴史公文書等に記録されている情報	一定の期間 (目安)	該当する可能性のある情報の類 型の例(参考)
個人に関する情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	50年	イ 学歴又は職歴 ロ 財産又は所得 ハ 採用、選考又は任免 ニ 勤務評定又は服務 ホ 人事記録
重要な個人に関する情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	80年	イ 国籍、人種又は民族 ロ 家族、親族又は婚姻 ハ 信仰 ニ 思想 ホ 伝染性の疾病、身体の障害その他の健康状態 へ 刑法等の犯罪歴(罰金以下の刑)
重要な個人に関する情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人又はその遺族の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	110年を超える適切な年	イ 刑法等の犯罪歴(禁錮以上の刑) ロ 重篤な遺伝性の疾病、精神の障害その他の健康状態
(備考)		
1 「一定の期間」とは、個人の権利利益を害するおそれがあるかについて検討を行う期間の目安を参考として示したものである。本期間の起算日は、当該情報が記録されている歴史公文書等の作成又は取得の日に属する年度の翌年度の4月1日とする。		
2 「該当する可能性のある情報の類型の例」とは、この表の左欄にいう「個人に関する情報」又は「重要な個人に関する情報」にそれぞれ該当する可能性のある一般的な情報の類型を例示したものであって、特定歴史公文書等に記録されている情報がこの表のいずれに該当するかについては、当該情報の具体的性質、当該情報が記録された当時の状況等を総合的に勘案して個別に判断するものとする。		
3 「刑法等の犯罪歴」には、犯罪の被害者の情報を含む。		

4 「刑法等の犯罪歴（禁錮以上の刑）」の「一定の期間」は110年を目途とする。「重篤な遺伝性の疾病、精神の障害その他の健康状態」についての判断に当たっては、疾病の程度、医療の状況及び疾病に対する社会の受け止め方等を考慮し、「一定の期間」は140年を目途とする。

出所：国立公文書館「独立行政法人国立公文書館における公文書管理法に基づく利用請求に対する処分に係る審査基準」 別添参考資料より

(<https://www.archives.go.jp/information/>) 最終閲覧日、2023年12月20日。

以上の表から、最高で140年が個人情報の開示目安だが、それは、備考4にあるように犯罪や病歴であって、その他の最高年限は80年である。遊女関連の史資料は、150年前の明治初期に作成されたものである。その段階で、個人情報はなぜ保護されうるのか、時の経過を考えれば、誓約書なしに公開されうるものではないだろうか。そのため、閲覧のための誓約書への署名は不要であるとするのが妥当である。個人情報に関わる基準の曖昧性が、デジタルアーカイブを通じた公開を妨げているとすれば、規定の運用における合理性の議論や説明、場合によって規定の見直しが必要であろう。特に遊女の場合、「源氏名」が個人の特定に至るような「個人情報」となり得るのかも合わせて議論されたい。源氏名は、本当の名も死後の戒名もわからない女性たちがたしかにそこに生きた証でもある。何を以て隠されようか。

5. おわりに

本稿は、吉原を研究している筆者が実際に史資料へアクセスするときに困難であったことを述べたものである。同じようなものは既に瀬畑源『公文書をつかう—公文書管理制度と歴史研究—』（青弓社、2011）があるが、本稿は、公文書そのものへのものというのではなく、個別具体的な吉原史資料のなかでのものである。

2章では、先行研究の整理と近年における史資料の紛失事例を挙げ、3、4章では吉原に関する史資料の具体的なアクセス阻害事例とその要因を挙げた。そこでは、大学図書館や役所といった公の施設でさえ、吉原史資料の滅失があったことが判明した。また、国立国会図書館のように史資料は存在するが、掲載情報の不備によるアクセス阻害もあった。その他には、東京都公文書館や岩瀬文庫のように交通アクセスによる阻害もあった。

台東区役所および東北大学附属図書館狩野文庫の事例においては、過去の文献で存在が確認されたが、今現在アクセスできないというものであり、管理体制のあり方の見直しが図られる。国立国会図書館デジタルコレクションの事例は、遊廓研究者との協力によって早急な見直しが求められる。細見と評判記の区別は研究上、吉原における支配構造に関わるため

重大である。岩瀬文庫および東京都公文書館は、デジタルアーカイブの整備と公開に関わる規定の見直しが求めたい。貴賤なく全ての人が等しく史資料を使える環境整備も、また研究への促進となる。吉原史資料を所蔵するすべての機関に以上のような問題に取り組んでもらいたい。

参考文献

- 網野善彦『文書返却の旅—戦後史学史の一齣—』（中央公論新社、1999）
- 安藤正人「記録史料学とアーキビスト」『岩波講座日本通史別巻3 史料論』（岩波書店、1995）
- 安藤正人「第一章 記録史料学の課題」『記録史料学と現代—アーカイブズの科学をめざして—』（吉川弘文館、1998）
- 石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』（中央公論社、1967）
- 上野千鶴子『発情装置 新版』（岩波書店、2015）（初出、筑摩書房、1998）
- 江戸吉原叢刊行会編『江戸吉原叢刊』第5巻（八木書店、2011）
- 奥村弘編『歴史文化を大災害から守る—地域歴史資料学の構築—』（東京大学出版会、2014）
- 小野晋「初期遊女評判記集」（同『近世初期遊女評判記集 研究篇』（古典文庫、1956））
- 加藤雀庵「新吉原細見記考」（国書刊行会編『鼠璞十種 第1』（国書刊行会、1916））
- 倉金宙本「近世吉原遊廓の終焉—一名を明かす遊女たち 「吉原細見」の分析から—」（https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/fees_schol/scholarship/report2021/）
- 国立公文書館「独立行政法人国立公文書館における公文書管理法に基づく利用請求に対する処分に係る審査基準」（<https://www.archives.go.jp/information/>）
- 鈴木俊幸『葛屋重三郎 近世文学研究叢書9』（若草書房、1998）
- 台東区史編纂委員会『台東区史 行政編』（東京都台東区役所、1998）
- 高木まどか『近世の遊廓と客—遊女評判記にみる作法と慣習—』（吉川弘文館、2021）
- 塚田孝「吉原—遊女をめぐる人びと—」（同『身分制社会と市民社会—近世日本の社会と法—』（柏書房、1992））
- 東京都台東区役所編『台東叢書 新吉原史考』（東京都台東区役所、1960）
- 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店、2015）（初出、岩波書店、1995）
- 西山松之助『江戸文化誌』（岩波書店、2006）（初出1987）
- 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店、2020）
- 人見佐知子『近代公娼制度の社会史的研究』（日本経済評論社、2015）
- フレデリック・クレインス『オランダ商館長がみた江戸の災害』（講談社、2019）
- 宮間純一「補論 千葉県文書館収蔵公文書の廃棄・移動をめぐる問題に関する報告」（同編『公文書管理法時代の自治体と文書管理』（勉誠出版、2022）（初出、宮間純一「千葉県文書館収蔵公文書の廃棄・移動をめぐる問題に関する報告」『アーカイブズ学

研究』26号(2017))

宮本(山城)由紀子「「吉原細見」の研究—元禄から寛政期まで—」『駒沢史学』24(1977)

宮本由紀子「明治期の吉原—「吉原細見」の分析を通して—」『駒沢史学』34(1986)

宮本由紀子「吉原仮宅についての一考察」(地方史研究協議会編『都市の地方史—生活と文化—』(雄山閣、1980))

横山百合子「芸娼妓解放令と遊女—新吉原「かしく一件」史料の紹介をかねて—」『東京大学日本史学研究室紀要別冊 近世社会史論叢』(2013)

横山百合子「「梅本記」—嘉永二年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介—」『国立歴史民俗博物館研究報告』200巻(2016)

横山百合子『江戸東京の明治維新』(岩波書店、2018)

横山百合子「遊女の「日記」を読む—嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件をめぐって—」(長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』(岩波書店、2020))

吉田伸之「遊廓社会」(塚田孝編『都市の周縁に生きる 身分的周縁と近世社会4』(吉川弘文館、2006))

¹ 本稿における吉原(遊廓)とは、新吉原のことである。

² 上野千鶴子『発情装置 新版』(岩波書店、2015)(初出、筑摩書房、1998)、塚田孝「吉原—遊女をめぐる人びと—」(同『身分制社会と市民社会—近世日本の社会と法—』(柏書房、1992))、中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店、2015)(初出、岩波書店、1995)など。

³ 塚田孝「吉原—遊女をめぐる人びと—」(同『身分制社会と市民社会』(柏書房、1992))。

⁴ 吉田伸之「遊廓社会」(塚田孝編『都市の周縁に生きる 身分的周縁と近世社会4』(吉川弘文館、2006))。のち、遊廓社会論の到達点として、佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ 遊廓社会』1、2巻(吉川弘文館、2013～2014)が刊行された。

⁵ 鈴木俊幸『葛屋重三郎 近世文学研究叢書9』(若草書房、1998)。

⁶ 石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)。

⁷ 筆者はこの定義にいくらかの疑問があり、本稿でも簡単に触れるが、その詳細については別稿を期したい。

⁸ 宮本由紀子「「吉原細見」の研究—元禄から寛政期まで—」『駒沢史学』24(1977)、宮本由紀子「明治期の吉原—「吉原細見」の分析を通して—」『駒沢史学』34(1986)。

⁹ 細見と評判記のもっともの差異は、評判があるか否かである。細見と評判記が同一視されやすいのは、評判記にある「遊女名寄せの部」を細見として捉えるからである。また、細見の定義が遊女の名寄せ+吉原の地図となっているにもかかわらず、名寄せがない時代のものも細見として扱っていることに疑問を抱く。以下に、『国史大辞典』の引用を試みる。

遊女や遊女屋の格を示す合印(あいじるし)、遊興費の目安になる揚代金が記載された江戸吉原の遊里案内書。近世中期から出版され昭和30年(1955)代に吉原が廃業するまで続いた。初見は寛永19年(1642)の『あづま物語』といわれ、「遊女評判記」に各遊女屋に抱えられた遊女たちの源氏名を記載した「細見記」を付録したもの。元禄期以降「細見記」の部分のみが独立し、文学的傾向の強い「評判記」に対し人別帳の形式で案内書の機能に重点を置いたものになった。ただし当初は一枚摺りの地図(「絵入大尽図」、元禄2年(1689))で縦七九センチ、横八九センチの大形で享保10年(1725)代まで続く。(後略)

『国史大辞典』では但し書きで、当初は一枚摺りで、とあるがここに名寄せは一切ないため、本当に遊女評判記の「名寄せの部」から独立したものと細見を定義できようか。宮本は、評判記から「細見記」が独立したのを元禄期以降としているが、これは検討の余地を残す。『吉原丸鑑』という評判記は「惣評論」で「さん茶むめ茶の内にして、三浦山口の太夫の名に同じき名を名のりたまふかたぐをば、ことぐくその名を此

書にあぐる事なし」(『吉原丸鑑』巻6(江戸吉原叢刊刊行会編『江戸吉原叢刊』第5巻(八木書店、2011))、277頁)とあるように、完全ではないものの、ほとんどの遊女を採録していることが窺える。また、評判記でありながら、惣女郎は名前を集めただけの、まさに「細見記」の役をしている。つまり、評判記と細見に宮本の言うような評判記のある部分が独立→細見という完全なる連続性は、見出すことが現状できない。本稿ではこれ以上の追究はなさないが、細見について再考を要されるだろう。

¹⁰ 小野晋「初期遊女評判記集」(同『近世初期遊女評判記集 研究篇』(古典文庫、1956))。

¹¹ 高木まどか『近世の遊廓と客—遊女評判記にみる作法と慣習—』(吉川弘文館、2021)。

¹² 長谷川貴彦「序章 エゴ・ドキュメント研究の射程」(同編『エゴ・ドキュメントの歴史学岩波書店、2020』)。

¹³ 横山百合子「『梅本記』—嘉永二年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介—」『国立歴史民俗博物館研究報告』200巻(2016)、横山百合子「遊女の「日記」を読む—嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件をめぐる—」(長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』(岩波書店、2020))。

¹⁴ 加藤雀庵「新吉原細見記考」(国書刊行会編『鼠璞十種 第1』(国書刊行会、1916))。

¹⁵ 石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)、122～123頁。

¹⁶ 石井の言う「芳原細見」が万治元年刊行で存在したとすれば、吉原の歴史は大きな転換をせざるを得ない。まず、寛文期に誕生したとされる散茶は、それよりも10年早く存在したことになり、細見自体が江戸初期より独立形態を持って存在していたことになる。

¹⁷ フレデリック・クレインス『オランダ商館長がみた江戸の災害』(講談社、2019)。

¹⁸ 宮本由紀子「吉原仮宅についての一考察」(地方史研究協議会編『都市の地方史—生活と文化—』(雄山閣、1980))。

¹⁹ その様は、「明治44年 吉原大火災」の名で写真とともに掲載がある

(<https://www.chiba-muse.or.jp/OKA/DisastersAndRevival/BigFire/bigfire.htm> 千葉の県立博物館デジタルミュージアム、最終閲覧2023年7月27日)。

²⁰ 「吉原遊廓 面影なき街に「見返り柳」 江戸文化の発信地、震災では悲劇も」『産経新聞』(<https://www.sankei.com/article/20221107-SA3H4XOECRIORE5YSLP4ALEXIA/> 最終閲覧2023年7月27日)。

²¹ 「東京大空襲 77年 燃えた大イチョウ、爆ぜた石組み 戦火の傷痕、今も」『東京新聞』(<https://www.tokyo-np.co.jp/article/164735> 最終閲覧2023年7月27日)。

²² 「もし、火事の結果、若干の遊女屋が焼残ることがあると、消防夫はことさらこれを焼き払ったという。」(石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)、88頁)。

²³ 事件の経過については宮間純一「補論 千葉県文書館収蔵公文書の廃棄・移動をめぐる問題に関する報告」(同編『公文書管理法時代の自治体と文書管理』(勉誠出版、2022)(初出は宮間純一「千葉県文書館収蔵公文書の廃棄・移動をめぐる問題に関する報告」『アーカイブズ学研究』26号(2017)))に詳しい。

²⁴ 「博物館古文書紛失か」『読売新聞』(<https://www.yomiuri.co.jp/local/saitama/news/20230301-OYTNT50064/> 最終閲覧2023年7月27日)。

²⁵ 石井良助『吉原—江戸の遊廓の実態—』(中央公論社、1967)では、「梅木屋」だが、細見では確認できないので、誤植と思われる。

²⁶ 石井良助前掲(1967)、191頁。()内は筆者が補った。

²⁷ 石井良助前掲(1967)、191頁。

²⁸ 東京都台東区役所編『新吉原史考』(東京都台東区役所、1960)

²⁹ 横山百合子「『梅本記』—嘉永二年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介—」『国立歴史民俗博物館研究報告』200巻(2016)。

³⁰ 熊田亮介「狩野文庫」『国史大辞典』(ジャパンナレッジ版)、「狩野文庫」『百科事典マイペディア』より。

³¹ 西山松之助『江戸文化誌』(岩波書店、2006)、200～201頁。

³² 「慶応3(1867)年10月6日、須田町の肥料商、岩瀬弥蔵の長男として誕生。幼名は吉太郎です。吉太郎が20歳の時、突然、本家の猪代治が亡くなったので、本家の山本屋へ養子に入りました。さらに猪代治の長女れいと結婚、四代目弥助を名乗りました(明治20年・1887年)。明治30年代には西三河でも屈指の資産家になっていきました。明治31年、西尾町長に就任しましたが、わずか1年4か月余りで辞任し、その後は政治への関心をなくしました。一代で莫大な財を築く一方で、西尾鉄道を開通させたり、病院や学校の建設資金を寄附したりと、町づくりや地域の教育にも強い関心を寄せました。」(「岩瀬弥助と岩瀬文庫の歴史」<https://iwasebunko.jp/about/history.html> 最終閲覧2022年6月19日)

³³ 岩瀬文庫HPより (<https://iwasebunko.jp/> 最終閲覧2022年6月19日)。

³⁴ これらは筆者が2023年1月時点で岩瀬文庫に全て報告したものである。

³⁵ 東京都公文書館HPより (<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/01soumu/archives/01aboutus.htm> 最終閲覧2023年6月9日)

³⁶ 吉原健一郎「東京都公文書館」『国史大辞典』。

³⁷ 横山百合子「芸娼妓解放令と遊女—新吉原「かしく一件」史料の紹介をかねて—」『東京大学日本史学研

究室紀要別冊「近世社会史論叢」(2013)、横山百合子『江戸東京の明治維新』(岩波書店、2018)。

³⁸ 人見佐知子『近代公娼制度の社会史的研究』(日本経済評論社、2015)

³⁹ 「江戸明治期史料 or 公文書_簿冊 or 公文書_件名_府市 or 公文書_法令類纂 or 公文書_件名_都」にて検索

⁴⁰ 「国立国会図書館について」(<https://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/index.html> 最終閲覧 2023 年 7 月 22 日)

⁴¹ 国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/ja/> 最終閲覧 2023 年 6 月 10 日)

⁴² ログインなしで閲覧可能な数。

⁴³ 国立国会図書館デジタルコレクションは、「遊女評判記」でほとんど登録しておらず、「評判記」で登録しているためこの検索せざるを得ない。

⁴⁴ フレデリック・クレインス『オランダ商館長がみた江戸の災害』(講談社、2019)。

⁴⁵ 宮本由紀子「吉原仮宅についての一考察」(地方史研究協議会編『都市の地方史—生活と文化—』(雄山閣、1980))。

⁴⁶ 奥村弘編『歴史文化を大災害から守る—地域歴史資料学の構築—』(東京大学出版会、2014)。

⁴⁷ 『台東区史 行政編』(台東区役所、1998)、138 頁。

⁴⁸

https://www.kosho.or.jp/products/list.php?transactionid=e09e87bd42cdba7efd2395d145c315e66faab203&mode=search&search_only_has_stock=1&search_word=%E8%BF%91%E4%B8%96%E9%A2%A8%E4%BF%97%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A%E3%80%80%E7%B4%B0%E8%A6%8B (「日本の古本屋」2023 年 6 月 9 日アクセス)

⁴⁹ <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA71178582> (最終閲覧日 2024 年 1 月 15 日)。しかし、ここにある 4 件というのは不正確で、それぞれを「個別名」で登録している跡見学園女子大学新座図書館は、全て所有している。ただし、それでも 6 件ほどしか所有していない。

⁵⁰ https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=431522747 (「日本の古本屋」2023 年 12 月 21 日アクセス)

⁵¹ <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA43580642#anc-library> (「吉原風俗資料 : 全」CiNii における大学図書館所蔵状況、最終閲覧日 2024 年 1 月 15 日)。

⁵² 「博士人材追跡調査—第 4 次報告書—」(<https://www.nistep.go.jp/wp/wp-content/uploads/NISTEP-RM317-FullJ.pdf>)

⁵³ 「第 15 章 大学院生に対する経済的支援の現状とあり方(2)」(「高等教育段階における学生への経済的支援の在り方に関する調査研究」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/30/1296721_6.pdf) (最終閲覧日 2024 年 1 月 15 日)。

⁵⁴ <https://dl.ndl.go.jp/pid/2541139/1/1> (「元文 5 年 吉原細見」(国立国会図書館デジタルコレクション、最終閲覧日 2023 年 12 月 21 日))

⁵⁵ <https://dl.ndl.go.jp/pid/2539875> (「吉原細見」(国立国会図書館デジタルコレクション、最終閲覧日 2023 年 1 月 20 日))

⁵⁶ 「国立国会図書館件名標目表 (NDLSH)」

(https://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/classification_subject/index.html) 最終閲覧 2023 年 7 月 2 日。

⁵⁷ <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/768096/1/1> (「新吉原細見」明治 21 年、最終閲覧日 2024 年 1 月 15 日)。

⁵⁸ 概要は、拙稿「近世吉原遊廓の終焉—名を明かす遊女たち 「吉原細見」の分析から—」(中央大学文学部学外活動応援奨学金報告書 (2021 年度)

https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/fees_schol/scholarship/report2021/)